

moha と mūḍha について

田 中 一

原始仏教以来、十二因縁説や五蘊説等において説かれている無明 (Av
idyā) すなわち、癡を示す語に標題の moha と mūḍha とがある。

そこで、この両者に対して、

一 なぜ癡という一つの概念をあらわすために二つの語が使われている
のか

二 この両者間には如何なる相違があるのか

以上の二点について検討を試みたいと思うのであるが、今は後者に重点
を置いて述べることにする。

まず、moha と mūḍha の二語はパーリ尼柯耶中において如何に取扱わ
れているかという点、Rhys Davids は^①moha について、語根は $\sqrt{\text{muh}}$
(愚かである) であり、サンスクリットにおいても、同じく moha である
ことを示し、愚鈍・迷わすこと等と解釈して、長部經典三(Dīgha-nikāya
Ⅲ.) 等の出典を明らかにしているのであるが、Dīgha-nikāya Ⅲ に^②

Buddho samāno kiṃ labhati ? Avikkhambhiyo hoti affhantar
ebivā bāhirakehi vā paccatthikehi vā paccāmittehi rāgena vā
dosena vā mohena……。

すなわち、

仏陀となれば何をを得るのか。内外の怨敵や仇敵にも、或は貪にも瞋に
も癡にも……後略。

とある如く、moha は貪。瞋と共に三不善根の一つとして取扱われている

場合が殆んである。

また、mūḍha に相当する mūṭha については、語根 $\sqrt{\text{muh}}$ の過去受動分詞 (passive past participle) であり、迷妄なる・癡冥の・愚鈍なる等と解釈している。これについて、Sutta-nipāta に

mohaṃ atikkanto ti pucchanto, yena mohena mūḷho micchadittṭiṃ gaṇhāti, tassātikkaṃena sammāditṭhiṃ pucchati.

すなわち、

愚癡を超越するというのは、何でも愚癡によって愚かな邪見を取るこ
とから超越している正見をいうのである。

とある如く、mūḷha すなわち mūḍha は moha の意味、或は語義を補うために使用せられていたのではないかと考えられるのである。

次に、サンスクリットでは如何なる意味で moha と mūḍha が使われているかという点、Monier-Williams は、moha は男性名詞で、語根は第一種動詞の $\sqrt{\text{muh}}$ であることを示し、意識の喪失等と解釈しており、パーリ尼柯耶の moha と同義語であり、また mūḍha も過去受動分詞であって、混乱せられたる、はつきりと知らない等と解釈して、パーリ尼柯耶の mūḷha と同義語であることを示しているのである。

また、V. S. Apte^⑤・Macdonell^⑥・Böhtlingk^⑦ 等も Monier と大同の見解を示しているのであるが、Edgerton のみ、moha はサンスクリットにおいて男性名詞のみであることを示し、その意味は迷わすこと・思ひ違いであるとした後、mūḍha の複数であるとしているのである。

さて、この moha と mūḍha の二語を梵文：法華經において見ると、まず moha は方便品に二ヶ所・藥草喻品に三ヶ所・安樂行品に一ヶ所・藥王菩薩本事品に一ヶ所・妙音菩薩品に一ヶ所・普門品に二ヶ所・妙莊嚴王本事品に二ヶ所との合計十四ヶ所に見られ、その中の七ヶ所は鳩摩羅什^⑩訳妙法蓮華經において三不善根 (三毒) である貪瞋癡の癡として訳出せら

れているのである。

次に *mūḍha* について見ると、譬喩品に三ヶ所・藥草喩品に三ヶ所・
寿量品に二ヶ所との合計八ヶ所^⑫に見られるが、毘摩羅什訳妙法蓮華經の該
当ヶ所にはこの *mūḍha* に対する訳出が見られないのである。ただし、
闍那崛多笈多共訳添品妙法蓮華經の藥草喩品の該当ヶ所にはそれぞれ、癡
・愚癡・癡と訳出せられている。

以上によってわかる如く、法華經においてもこの *moha* と *mūḍha* の
両者はパーリ尼柯耶における場合と同様に *moha* は三不善根の一つとし
て愚癡蒙昧である言葉の総称であり、*mūḍha* は他の概念を修飾するため
に使用せられているということが知られるのである。

また、チベット語ではどの様に取扱われているのかというと、翻訳名義
大集 (*Mahāvvyutpatti*) には、*moha* は *gti-mug* 或は *rmoṅs-pa* であ
り、癡・愚癡・蒙を意味することを示し、*mūḍha* は *smoṅs-pa* 或は *ḥa-*
m rmoṅs-pa 等であり、昏愚・癡者等を意味し、また昏愚なるとして
分詞であることが示されている。

そして、宇井博士等^⑬の五つの索引を通じて見ると、大体 *moha* と *mū*
dha はそれぞれ *gti-mug* と *rmoṅs-pa* であるように考えられるのであ
る。

ところで、世親 (*Vasubandhu*) は俱舍論と唯識三十頌において如何に
この二語を使っているのであろうか。

まず、俱舍論では、大煩惱地法すなわち、第四卷の分別根本第二之二の
偈頌^⑭に *mohaḥ* とあり、玄奘訳・真諦訳共に癡と訳出しているのであり、
また不善根すなわち、第十九卷の分別睡眠品第五之一の偈頌^⑮には、*mūḍha*
yaḥ とあり、玄奘訳では不善癡・真諦訳では無明と訳出せられているので
ある。

そして、この俱舍論の偈頌がそのまま、梵文唯識三十頌の第十一偈^⑰に用

いられているのである。すなわち、

rāgapratighamūḍḥayah || 11 || 貪・瞋・癡

とあるのがそれである。

ここで注意すべきは、従来 mūḍha であったものが、俱舎・唯識を通じて mūḍhi を使用していることである。これは三不善根の概念をあらわす語として従来用いられてきた rāga-dveṣa-moha と較べると rāga を除いて、dveṣa は pratigha に、moha は mūḍhi に世親が何等かの概念規定があって取換えたものであろうと考えられる。また、この二語は称友⁽¹⁸⁾ (Yaśomitra) の俱舎疏によると、「mūḍhi というのは moha の異名である (Mūḍhir iti moha paryāyah)。」とせられているのである。

いずれにしても、moha と mūḍha の両者は共に語根 \sqrt{mnh} の変化したもので前者は男性名詞、後者は過去受動分詞であり、漢訳ではこの二語を俱に癡・愚癡と訳出せられる場合が多いが、厳密に言えば前者は普通名詞であるため癡・愚癡としてもよいが、後者の場合は分詞であるから癡者・不知者すなわち、癡なること・真理を知らないこと等と訳出せらるべきものではなからうかと考える。

そして、俱舎・唯識を通じて、この moha と mūḍha の二語に対して、何等かの使分けが存していたことは認めて差支えなからうと思う。

註

1. Rhys Davids and Stede: Pali-English Dictionary (P.T.S.)
2. P.T.S. the Digha-nikāya III. p. 146
3. P.T.S. Sutta-nipāta Commentary being Paramatthajotika II. P. 205
4. Monier-Williams : Sanskr̥t-English Dictionary
5. V.S. Apte : Sanskr̥t-English Dictionary
6. A.A. Macdonell : A practical Sanskr̥t-English Dictionary
7. O. Böhtlingk und R. Roth : Sanskr̥t-Wörterbuch
8. F. Edgerton : Buddhist Hybrid Sanskr̥t Dictionary
9. U. Wogihara and C. Tsuchida : Saddharma Puṇḍarika Sūtram Romanized and Revised Text (以下 W.T 本と略す)

10. W. T 本の44・53・73・88・126・129・247・349・356・363・364・389・390頁
11. 大正・9・1・C
12. W. T本の61・81・90・125・128・129・275・278頁
13. 大正・9・134・C
14. 宇井伯寿著「梵漢対照菩薩地索引」・山口益著「中辺分別論釈疏梵本索引」
・中村瑞隆著「藏和对訳究竟一乘宝性論研究」。
Takashi Hirano : An Index to the Bodhicaryāvatāra pañjikā,
chapter IX・Gadjin M. Nagao : Madhyāntavivhāga-Bhāṣya
15. 大正・29・19・Cの偈頌を参照
16. 大正・29・103・aの偈頌を参照
17. Sylvain Lévi : Viññaptimātratāsiddhi, part II, P.28, L.11.
18. U. Wogihara: Sphutarthā Abidharmakośavyakhyā, part II, P.463, L.28